Footprint
フットプリント
写真資料
調査部会発行
2009年
第５号

そこには人々の声、真夏の光が溢れているはずだった
雲に覆われた被爆翌日の長崎、地上は苦しみが溢れた

長崎の被爆写真調査会
発足三十周年記念写真展を
開催いたします。多数の御来
場をお待ちしています。

原爆投下２日前（午前８時４０分頃の撮影）

原爆投下翌日（午後１時頃の撮影）　　写真提供：（財）日本地図センター

「長崎の被爆写真調査会」

私たちが週一回活動している長崎原爆資料館内の一室、写真資料を収納したロッカーの上に一枚のプレートがある。その存在に気付く者は稀だが、私たち部会員は、決して忘れてはならないものだ。

（財）長崎平和推進協会写真資料調査部会は、現在被爆写真資料の検証作業を中心に活動しているが、協会創立五年前、既に「長崎の被爆写真調査会」の名称で活動を開始していた。最初の活動は長崎市内の個人宅で始まった。現在三千枚以上の長崎原爆に関する写真を所有するまでになったが、その多くは当時の会員の熱い想いと努力なしには収集し得なかった。「今、しなくてはならない」、同じ思いに駆られた六人の力が、多くの写真家や協力者の心を動かしていった。現在も少人数の部会だが、その活動の意義と果たす役割は決して小さくない。

発足三十年を記念し開催する今回の写真展（八月四日～七日長崎原爆死没者追悼平和祈念館・八月八日～十日ブリックホール）に際し、米軍が撮影した八月七日、十日の長崎市街地の航空写真を、新たに㈶日本地図センターより購入した。従来の返還写真より広範囲で、より鮮明な画像を眼にすることができる。住居や樹木の細部までが明瞭な被爆二日前の街並みからは、人の息遣いまでが感じられる。しかし被爆翌日の写真では、雲の下に広がる街の状況を想像するだけで、鳥肌が立つ思いに駆られる。

1981（昭和56）年６月20日（土）
「長崎の被爆写真調査会」活動風景

中学校での原爆写真展

六月九日から七月三日までの四週間、長崎市立滑石中学校で原爆写真展が開催された。開期を前半・後半の二週に分け、写真を入れ換えて計七十枚が展示された。今回、道の尾駅など校区にちなんだ数枚も加えられた。

小・中学校での「ミニ写真展」開催は、ここ数年来の活動目標の一つだが、それが今回実現の運びとなったものだ。今後も、校内という身近な場所で児童・生徒が被爆写真に目を向け、関心を持つ機会が増えることを望んでいる。

職員室前廊下にて写真展の準備する生徒

※滑石中学生感想

◆「原爆により一瞬にして長崎が火の海になった」と聞いていましたが、その前は一体どうなっていたのだろうか？という疑問が写真をみてよく解った。

◆投下前と後の写真を見比べて、何もなくなった様子がむなしい状態でした。

◆これまで、見たことが無かったので、今回見れてよかったです。被爆前と被爆後の風景の違いには、びっくりしました。見たことを多くの人に伝えていきたい。

◆原爆で生き残った人も、放射線によって今も苦しんでいるということが分かった。

◆間近に見ることが出来て、いい経験になりました。「黒こげになった少年」から被害の酷さを知り、平和について感じることが出来ました。

◆滅多に見られない珍しい写真でした。見学しながら、原爆の恐ろしさを再認識しました。継承するように頑張ります。

◆投下前の町はきれいだなぁと思いました。それが、たった一つの原爆により、たくさんの命を失い、家族とも離れればなれになったと思うと可哀そう。もしも、自分の家族と離ればなれになったら、嫌だし、とてもつらいと思います。私たちは、原爆によって多くの命を失い、たくさんの人が悲しんだことを決して忘れてはいけない。平和の尊さ、戦争を絶対繰り返さないことを次の世代の人にも、ちゃんと知ってもらいたい。いつまでも、平和な世界が続いてほしいです。

◆**「展示している写真をカメラで写すのはダメ」**と言われたのには驚きました。※（写真には著作権が存在するので、管理者に無断で複写はできません。ただ残された被爆写真は、より多くの人が目にすることで意義を持ちます。見たいときに見ることのできる環境を整えることが大事だと、私たちも思っています。）

きっかけは、ナガサキ

五月十七日、アメリカ・アリゾナ州在住のスーザン・サザード女史が長崎原爆に関する著書執筆のため来崎、原爆資料館内で被爆者五名にインタビューを行った。彼女は日本への留学、日本国内のテレビ局に勤務経験を持ち、流暢な日本語を話す。

彼女が広島ではなく、長崎に関心を持った経緯を訊ねてみたところ、その一つは高校時代の長崎への修学旅行で、被爆者の体験講話を聞いた事だったと言う。初めて聞く内容は心に残り、忘れることはなかったそうだ。昭和六一年（一九八六）年、ワシントンＤＣで谷口稜輝氏の通訳を務めたことで長崎への想いは強くなり、長崎原爆についての著作のプランが固まっていった。彼女のインタビューは、ひとりひとりの目をしっかりと捉え、ひとつの言葉さえも聞きもらさず、心の中までも見透かしそうな迫力に圧倒される。

助手としてお嬢さんを同伴されていたが、彼女もまた興味深く聞いていた。海外で長崎原爆に取り組んでいる人たちがいる、そう思うだけでも心強さを感じる。

著作の完成と出版が待たれる

消えた街なみの復元

この一カ月、写真資料調査部会室は、若い雰囲気が溢れている。部会の協力のもと、長崎大学教育学部全炳徳（ちょんびょんどく）教授研究室の女子大生二人が、3Dモデリング（物体の立体化）の技術を用いて、被爆前の松山町周辺の復元に取り組んでいるからだ。

爆心直下の松山町は、県道沿いの商店街の賑いや、アンジェラスの鐘が響き渡った街全体の記憶が、被爆により一瞬のうちに消滅した町である。

爆心地復元運動は、戦後二十五年を経た一九七〇（昭和四十五）年七月に結成された「松山町復元の会」が最初である。生き残った市民による、空白の地図を一軒一軒埋めていく作業のなかで、失われた三〇〇世帯、一八六五人の存在が記録されていった。「かつての町が浮かび上がり、犠牲となった肉親の一人一人が躍り出てくる思いにかられた。（日本放送出版協会/長崎　爆心地復元の記録）」という。この作業はやがて長崎市の「原爆被災復元調査事業」へ発展し、四年後「被災地復元図」が完成した。

今回約四十年振りに、再び新たな町並み復元の第一歩が始まった。彼女らの熱意に期待したい。

復元中の松山町の3D画像

隠された手がかり

松田　斉

一瞬にして原子野と化した長崎・浦上地区。被爆前、そこにどんな町並みや暮しがあったのかを知ることは、原爆被害の実態を明らかにする上で不可欠の作業だ。広島では家族を原爆で失った映像作家により、被爆前の爆心地周辺を見事に再現したCG映像が既に製作されている。しかし長崎では三十五年前の被災地復元図完成以来、これまで街並みの立体的な復元には手が付けられていなかった。現在それを知る唯一といってよい手掛かりは、被爆二日前に米軍が撮影した航空写真だ。

その写真からは家の一軒一軒をかなり明瞭に識別できる。しかし残念ながら高度八千メートルからは、その家のたたずまいまでを知ることはできない。それらは地上写真に頼るほかはないが、戦前の浦上地区を撮影した写真は、調査部会保存のものを含め非常に少ない。被爆により各家庭の写真が失われたことが最も大きな理由だが、戦前の長崎が要塞地帯に指定され、写真撮影が制限されていたことも大きい。

被災地復元地図

昭和10年頃の松山町周辺

原爆資料館に展示されているものを始め、爆心地周辺の具体的な風景が分かる写真は数枚に過ぎない。したがって米軍の航空写真と被爆者の記憶を基に、あとは想像力を駆使してその空白を埋めるほかはない。一方で、長崎市内には中通り周辺や筑後町などに、戦前の民家が多数現存している。僅かに残された写真からは、江戸時代からの街道筋である山里町と、大正、昭和期の新興開発地域である松山町では、その成立時期による建築様式の違いが認められる。それらを考慮しつつ現存する民家の意匠を参考に、当時の街並みを推定していくのが有効ではないかと考え、現在その作業を進めている。

被爆前の松山町周辺に関する情報を集めています。写真や資料がありましたら、是非、ご連絡下さい。

【連絡先】㈶長崎平和推進協会
写真資料調査部会
〒〇九五―八四四―九九二二

今も天を睨んで坐す 福済寺の羅漢像

丸田　和男

被爆後の羅漢像

原爆で全壊全焼した国宝福済寺境内、如意をくわえた獅子像を頂く鐘鼓楼の石門の残骸と、その傍らで天を仰いで鎮座する羅漢像の写真は、長崎の被爆写真を代表する一枚である。

崇福寺・興福寺と並ぶ三福寺のひとつ福済寺は、寛永五（一六二八）年唐僧覚悔の開山で、長崎在住の漳州人の檀家が多かったことから漳州寺ともいわれる。

本堂は明朝式建造物で昭和二（一九二七）年国宝に指定され、他に国宝級の絵画なども数多く文化財の宝庫といわれた。八月九日の原爆で、爆心地から二・六キロ離れた福済寺は、当日の午後になって火炎に包まれ、豪華壮麗を誇った大伽藍は一夜にして灰燼に帰した。長崎市内で最後まで燃え続けていたのは福済寺だったともいわれる。

本堂は昭和二十七（一九五二）年和風様式の建物で再建された。昭和五十二（一九七七）年万国霊廟長崎観音の建立に伴い、焼け残った石門は取り壊され、羅漢像は現在の寺務所前に移された。今や昔の唐寺の面影を失った福済寺の境内の一隅で、天を仰いで坐し続ける石造りの羅漢像。住職の話によると、創建当初からのものでないことは間違いないと思うが、その年代、作者などは皆目分からないという。

六十四年前の業火の中から生き残ったこの羅漢さん、あの日以来周囲の風景も全く変わり、ビルの谷間から流れ行く雲を眺めつつ「核兵器がこの世から消えて無くなるまで、わしゃ未だ死なれんばい」と呟いているようである。

現在の羅漢像

今だからこそ、もう一度

被爆六十四周年・・・

来年もまた同じ思いで過しているのだろうか。毎年のように継承が叫ばれ、薄れゆく記憶に対する脅えと焦り。

それでも若い芽は確実に育ってきているように思える。その芽が幹となり、空いっぱいに枝をはり花をつけ、実をなす。

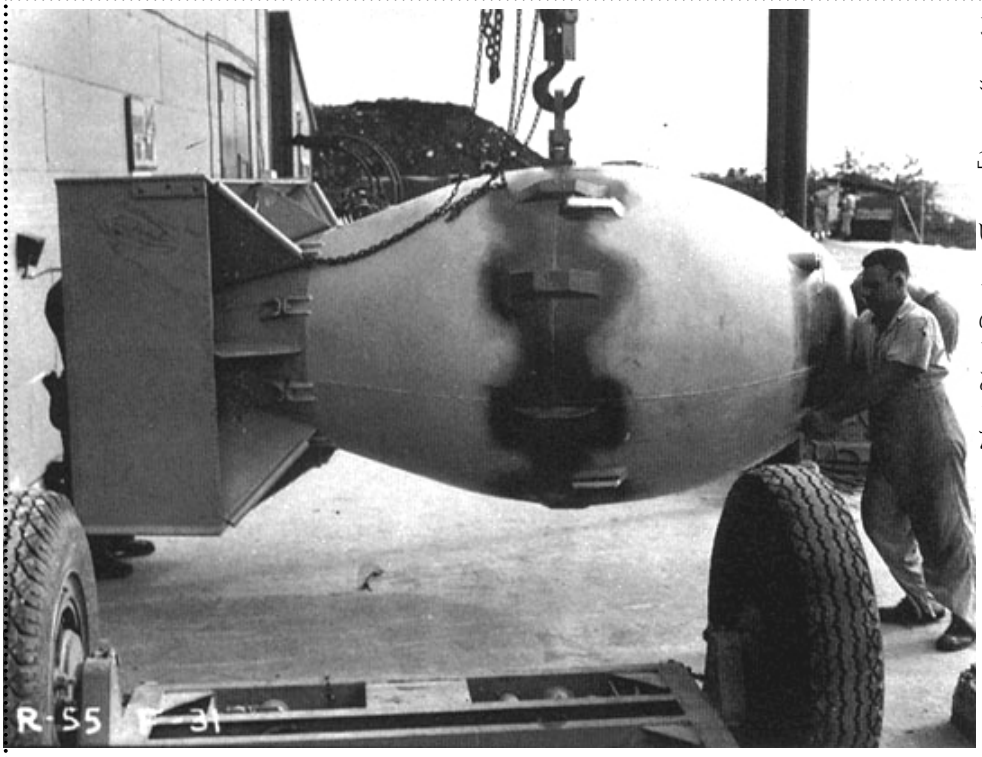
木に集う多くの鳥たち。そんな環境を整えることこそ重要ではないかと思う。

「想いは同じ」手を携え、真直ぐ歩んでいきたい。

今月の一枚

長崎原爆「ファットマン」

ファットマンは当初八月十一日に投下される予定であった。しかし天候不順のため予定日は二日早められ作業も急がれたが、八月八日には組み立てと搭載が完了した。爆弾全体は黄色に塗装され、接合箇所には機密性を高めるためのプラスチック塗料が吹きつけられている。尾翼には関係者の記念サインが見える。その中にはパーネル海軍提督による「ヒロヒトへのセカンドキッス」というものもあった。



撮影：米軍

写真提供：工藤洋三（徳山工業高等専門学校教授）